

# アンマン宣言

第7回 世界宗教者平和会議

1999

11月29日ヨルダン王国・アンマン

第7回世界宗教者平和会議は、「共生のための地球的行動」をテーマとして、ヨルダンのアンマンで開催された。本大会は、1970年、日本の京都に端を発したWCRPの伝統を継承しつつ、70ヶ国、15の諸宗教を代表する人々の参加を得て開会された。

共通暦でいえば、20世紀の最後、つまり21世紀および第3千年期の幕開けに先立って開かれた本大会の参加者たちは、一致協力して共生を追求し、地球的な平和文化の樹立に向かって献身しようと決意を新たにされた。ミレニアム（千年期）は、時の区切りを象徴するが、それは一つの転機、すなわち、革新と再献身の機会としての可能性を包含している。平和文化の形成に当たっては、文化や伝統に見られる共通性を是認し評価することも大切であるが、それとともに、それらのもつ多様性が主張され、称揚されなければならない。これまで、必ずしもそのようにはなされなかったことを率直に認めつつ、諸宗教は、多元的世界に対して、自己の聖典、教説、証言にのっとりた平和と和解のモデルを提示する新たな機会が到来したと認識するものである。こうした世界にあっては、宗教の担うべき責任には、文明間に不可欠の対話を拡大することのみならず、協力して主体的実践活動を行うということも含まれるであろう。

## 共通の人間性

WCRPは、男女を問わず、人間に共通の人間性を主張する。人は共通の人間性を持つものとして、何よりもまず尊厳と誠実、権利と責任を具有することが認められる。ただし、これらのものが、神の賜物か、宇宙の法則に由来する神的本性の表れか、内在的聖性や宇宙との一体性に基づくものかは、いまは問わない。こうした共通の人間性を肯定した上で、われわれは、人種、宗教、年齢、性別、民族、地位など、われわれに同一性を与える他の属性を、人間生活の素晴らしい多様性を構成するものとして確認することができる。社会的に公認されている区別が、個人と個人、集団と集団、多数者と少数者間の対立を生み出し、受容と排除、特権と拒否、威信と剥奪といった結果に終わることなしとしない。国際人権規約には、市民的、政治的、経済的、社会的、文化的諸権利が含まれているが、これらの権利は、すべての宗教的伝統に見られる共通の倫理的関心を現実化することなしには達成できない。宗教に共通の倫理的関心は、我々の隣人、および、助けを求める人々に対して、個人としても、社会としても責任を担うことを要求する。宗教は、われわれに、正義確立の基盤をなす愛、義務、責任などの精神的資源を豊かに得させてくれる。

「共生の実現には、文化的、社会的、経済的、市民的、政治的、軍事的諸制度の変革に止まらず、宗教制度の変革が必要であると確信する…（宗教は）平和を促進し、暴力紛争を防止する力を発揮しうるような社会的、道徳的資源を持っている。真の和解には、宗教自体も、そして宗教的動機をもった人々の行動にしても、これまた、紛争や苦悩や苦痛を惹起してきたことを、堪えがたくとも、率直に認めることが必要であり…（そして）われわれの非を告白し、裂かれた人間関係を回復するという懸命の努力を必要とする。和解は、真実の探究や自己責任の承認など、心を解放するプロセスを必要とする。」

## 共通の安全保障

WCRPは、人類とあらゆる生命体を守る共通の安全を達成するには、安全保障というものの包括的理解と、包括的行動態勢が必要であると主張する。一方では、軍国主義および宇宙空間の開発をも含むあらゆるかたちの軍事化が排除されなければならない。

WCRPは、人類とあらゆる生命体を守る共通の安全を達成するには、安全保障というものの包括的理解と、包括的行動態勢が必要であると主張する。一方では、軍国主義および宇宙空間の開発をも含むあらゆるかたちの軍事化が排除されなければならない。

他方で、正義の秩序と配慮ある統治を保持するための制度的諸手段が開発され、共通の安全保障に必要な社会的、経済的、環境的安全保障の相互関連性を盛り込まなくてはならない。これらの全てが相まって、主体的な共通の人間的安全保障が出来上がる。不安と恐怖は、従来、紛争や、軍備と戦争手段への依存などの原因をなすものとされてきた。恐怖からの自由と、欠乏からの自由は結び合っている。誰かの自由が、他者の不安を作り出すことによって達成されるとしても、それは決して長続きしない。正当な安全感は、信頼と、弱点をあえて共有することなしには生じない。

## 共通の相互依存

WCRPは、世界の諸国民が、経済的、環境的な諸現実の絡みあいのなかにあって相互に依存し合っており、この現実は、積極面と否定面を併せ持った地球化の動的的影響によってますます緊迫化していることを認識する。本質上包括的な、公正で持続的な人間開発という観念は、万人に対して物質的生存と充足を提供し、かつ万人にとって利用可能な、公正で依怙最肩のない生産と分配のシステムの開発を前提としている。こうしたシステムによって、人類家族の大部分の生活を特色づけている貧困と無力を根絶することができる。21世紀の最初の数十年間に貧困を根絶することは、政策的にも資金的にも可能であり、人類にとっての道徳的至上命令である。開発と環境の挑戦は、再生不可能な資源の枯渇、地球温暖化、あらゆる形での環境の汚染と劣悪化をもたらすので、両者を切り離すことが出来ない。

これらの事態は、とりわけ人口の増大が需要を倍加するので、生態系の生産・再生産能力を弱体化する。搾取的体制は、生態系を脅かすのみならず、底辺層の困難と苦悩を増大させ、将来の世代に対しては、破滅した地球とは言わないまでも、損傷した地球を与えることになるであろう。

## 共通の未来

WCRPは、われわれの共通の未来が、われわれの子供たちにおいて体现されていると主張する。子供たちに、生の充実を達成するという要求を保障することは、宗教的、市民的諸集団の責任である。われわれの子供たちは、人類家族としてわれわれが結び合わされているということの最も明らかなしるしである。子供たちの福祉と未来のために、人的物的資源が、すべての要求に先立って用いられなければならない。われわれの子供たちは、予防可能な病気から、女性や子供を最も多く犠牲者にする許しがたい戦争と暴力の荒廃から、そして、小児労働、少年兵、不当な金儲けの犠牲にする性的搾取など、あらゆる形態の搾取から保護されなければならない。子供たちは、思いやりのある家庭や社会のなかで、霊的、知的、肉体的に育成されるべきであり、家庭や社会はまた、そうした育成をなしうるような、社会的、制度的、経済的な支援を必要とする。子供たちは、性、階級、その他の特性に由来する人為的伝統的制約に縛られることなく、読み書きの能力を身につけ、もって生まれた能力を最大限に発揮できるよう、これに必要な諸技能を提供する教育制度のもとで育まれなければならない。WCRPは、子供たちのために、欲求ではなくて権利を、脆弱性ではなくて力強さを強調する新たな視点と発想を要求するものである。

## 共生

WCRPは、共生の実現には、文化的、社会的、経済的、市民的、政治的、軍事的諸制度の変革に止まらず、宗教制度の変革が必要であると確信する。こうした変革は、個人の心、知性、霊性の改心としても反映されなければならない。宗教的諸制度は、刷新のプロセスの一部となりうるし、またならなければならない。

このプロセスは先ず、宗教どうしの和解として始められなければならない。宗教は、直接的コミュニケーション、対話、教育、訓練などを行うことを通して、平和を促進し、暴力紛争を防止する力を発揮しようとする社会的、道徳的資源を持っている。真の和解には、宗教自体も、そして宗教的動機をもった人々の行動にしても、これまた、紛争や苦悩や苦痛を惹起してきたことを、堪えがたくとも、率直に認めることが必要である。苦情や苦難の記憶を長引かせ、絶えず蒸し返すことで、逆にこれを利用することさえある。それゆえに和解は、われわれの非を告白し、裂かれた人間関係を回復するという懸命の努力を必要とする。和解は、真実の探究や自己責任の承認など、心を解放するプロセスを必要とする。正義を達成するには、個人、市民社会、国家のそれぞれに、自己の行動に対して責任をとらせることが肝要である。ところで、復讐や報復の行為は、いたずらに暴力の循環を永続させるだけである。過去は取り消しようがない。なしうるかぎりの賠償や復元は、正義と癒しに役立つものとして、和解のプロセスに含められるべきである。けれども、過去は、それを繰り返さないようにするために、忘れ去られてはならない。

## 包括的平和教育

WCRPは、平和と共生のための包括的教育を推進することを誓約する。教育には、われわれの伝統的価値と遺産の伝達という側面がある。この伝達に当たって、過去の恨みや不平だけに焦点が当てられるとか、あるいは排他的傾向によってそれが歪められるとするならば、不満と不寛容の種子が蒔き続けられることになる。第三千年期に向けての価値の伝達は、種々の宗教や文化の価値と貢献を幅広く理解し、それらを尊重することを含めなければならない。そのことによって共有される平和文化は、単に一つの特定期文化だけの益となるのみならず、われわれの異なる伝統の豊かな遺産にとっても益となるであろう。教育はまた、個人が社会参加をし、社会や、万人の福祉に対する貢献をなし、共生のために行動する準備をさせるという面を含んでいる。それゆえに、他者の言うことに耳を傾けて理解し、寛容と理解を促進し、癒しと和解、平和文化の樹立に役立つような技を身につけることは、

教育のあらゆるレベル、そしてあらゆる社会的コミュニケーション手段における絶えざる学習項目とならなければならない。とりわけ、われわれの個々の教団内部において、正義と平和について証言することが求められる。

## 希望と決意

WCRPのビジョンと希望は、21世紀における共生へと向けられている。希望、それは、正義と平和の世界が実現可能であるというビジョンに基礎をおいているからである。希望、それはわれわれが、世界の挑戦とともに、それらを解決する可能性を認識しているからである。希望、それは、われわれが、適切に活用しようという意味さえもてば、人類の基本的ニーズに対応するだけの資源を入手しようからである。希望、それは、われわれのあらゆる宗教が、平和と公益の達成に献身することを誓っているからである。

しかし、希望は行動によって表明されなければならない。それゆえにWCRPは、新たなる千年期において、これらの共通目標の達成に向かってひたすら労することを誓約する。WCRPは、全ての宗教教団に対し、公益のための教育、主張、活動を通して、証を立てることを切に求める。

現在、全ての国の人々が参集する唯一の場所は、国連である。国連憲章は、平和の達成、人権の実現、法の支配の確立、万人の生活水準の向上などを命じている。国連の場において、われわれの霊的義務の象徴的表明が見いだされる。それは、国連本部の廊下で目に触れる芸術的文化的工作物においてである。世界はそこにおいて、われらの剣をうちかえて鋤となし、われらの槍をうちかえて鎌となすべしとの言葉、また、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよという言葉、そしてまた、われわれは共通の人間性から出来ているとか、われわれのうち最も讃えられるべきは、最も正しい人であるという言葉を読むことができる。願わくは、われわれの共生のための地球的行動が新たなる千年期において成就され、心と精神が平和と知恵の道具に変えられ、人間生活の価値が、あらゆる人に対する係わりのなかにおいて顕れ、われわれが正しい人の一人として讃えられんことを。

**Religions for Peace** 